

《林信雄先生像》の作者・川村栞について

沓沢 耕介

The Portrait of Dr. Nobuo Hayashi and Its Sculptor, Shiori Kawamura

KUTSUZAWA Kosuke

本稿では、川村栞（原姓・三串、旧姓・前野 1903-1981）の経歴と、このたび横須賀市自然・人文博物館に寄贈された《林信雄先生像》のほか、横須賀市内で見られる川村栞の作品について紹介した。川村栞は、夫である彫刻家・川村吾蔵（1884-1950）の助手をつとめ、その没後は、独立した彫刻家として横須賀市内で活動したことが知られており、《林信雄先生像》はそれを裏付ける史料のひとつである。

This article presents the biography of Shiori Kawamura (née Mikushi, formerly Maeno, 1903-1981) and introduces the "Portrait of Dr. Nobuo Hayashi," recently donated to the Yokosuka City Museum, along with other works by Shiori Kawamura visible in Yokosuka City. Shiori Kawamura served as an assistant to her husband, the sculptor Gozo Kawamura (1884-1950). After his passing, she was known to have continued her career as an independent sculptor in Yokosuka City. The "Portrait of Dr. Nobuo Hayashi" is one of the historical materials that supports this aspect of her career.

はじめに

本稿では、令和6年度に横須賀市自然・人文博物館に寄贈された林信雄博士関連の資料群のうち、林博士を像主とする肖像彫刻1点について紹介するとともに、作者である川村栞（1903-1981）の経歴について簡単にまとめる。川村栞は、彫刻家・川村吾蔵（1884-1950）の妻で、夫の没後は、独立した彫刻家として横須賀市内で活動したことがわかっているが、知られている作品は少ない。後段では、参考としてペリー記念館にある2件の作品を挙げ、彫刻家としての川村栞について若干の考察を加える。

原稿受付 2025年1月9日 横須賀市 博物館業績 第793号

Key Word: Gozo Kawamura, portrait sculpture

キーワード: 川村吾蔵 肖像彫刻

1. 《林信雄先生像》について

この像は、腕を省略し、胸より上部のみを表現するいわゆる胸像であり、短髪で鼻、耳に特徴のある林博士の容貌を写している【図1-1、1-2】。サイズは等身大か、またはやや小ぶりかと思われる。一見するとブロンズ像風であるが、ところどころ塗装が剥げて下地の石膏が露呈しており、石膏像に暗緑色の塗装を施したものとわかる。

向かって右側面に「祝林先生御還暦／昭和三十二年四月八日／川村 栞」との年記、署名があり、林博士の還暦を祝福する意味で、川村栞により昭和32年（1957）に制作されたことがわかる【図1-3】。4月8日は林博士の誕生日である。また、背面には林博士本人の書をもとにしたと思われる「人間萬／事塞翁／馬／信雄」の刻銘がある【図1-4】。

原状では、ご遺族の生活する家の広間、床の間にのせた専用の台上に安置されていた。長い間、温顔をもって家族を見守り続けてきたことがしのばれる。

なお、《林信雄先生像》という作品名は、刻銘の情報から筆者が仮に付けたものであることをおことわりしておく。

【図1-1】林信雄先生像（正面）



【図1-2】向かって右斜め前



【図 1 - 3】 向かって右側面刻銘



【図 1 - 4】 背面刻銘



2. 川村栞の経歴について

本像の作者・川村栞の経歴について、先行研究¹から抜粋するかたちで見たい。

川村栞は明治 36 年（1903）、熊本で父・三串太造、母・イ子（イネ）のもとに生まれた²。昭和 2 年（1927）、最初の夫・前野不二男と結婚³。不二男の父・前野芳造は大阪の資産家で、衆議院議員もつとめた人物であった⁴。不二男は商工省統計課に勤めており、栞との間に五女を儲けたが、昭和 11 年（1936）、流行性感冒のため急死してしまう⁵。この間、栞は西巣鴨に「錦華高等洋裁女学校」を設立し、「校長兼ドレスアーチスト」をつとめた⁶。

昭和 12 年（1937）、栞は婦人運動家の山田わか（1879-1957）を代表とする『婦人之友』の遣米使節に加わり、アメリカにわたった⁷。そして、この地で当時、彫刻家として活躍していた川村吾蔵（1884-1950）と知り合い、昭和 14 年（1939）3 月に結婚する⁸。またこのころから、吾蔵の制作助手をつとめるようになったという⁹。

川村吾蔵は長野県白田村（現・佐久市）生まれ¹⁰。水彩画家の丸山晚霞は遠縁にあたり、その影響などから芸術家を志し、明治 37 年（1904）に渡米¹¹。明治 42 年（1909）にはフランスへ渡り、アメリカ人彫刻家フレデリック・マクモニスの知遇を得て助手となった¹²。明治 45 年（1912）には国立美術学校（エコール・デ・ボザール）へ入学。翌年、特待生の扱いを受ける¹³。このころ、日本では白樺派を通じてロダンの受容が始まっており、その後、戦後に至るまでロダン芸術＝ロダニズム信奉の傾向が顕著となる。しかし吾蔵は、革新的なロダンの芸術に追従せず、むしろ古典主義的なアカデミズムの道を究めていく方向に進んでいった。第 1 次世界大戦中の大正 5 年（1916）頃、アメリカ・ミネソタ州の酪農家から理想的な乳牛の像（True Type）の制作を依頼されたことを契機として牛の研究に取り組んだ吾蔵は、やがて『牛の GOZO』としてアメリカ、ヨーロッパで名を知られるようになった¹⁴。

大正 13 年（1924）には、ホワイトハウスから当時のクーリッジ大統領の胸像製作の依頼を受けるなど、アメリカで彫刻家としての確固たる地位を築いた¹⁵。この間、大正 5 年（1916）にフランス人女性ジーン・ファーキュを妻に迎えたが、仕事に打ち込むあまり次第に疎遠となり、別居を経て昭和 10 年（1935）に離婚していた¹⁶。

昭和 15 年（1940）、吾蔵と栞は帰国し、12 月に世田谷区経堂町に構えたアトリエに住んだ¹⁷。吾蔵がアメリカでの生活を捨て、37 年ぶりに帰国したのは、紀元二千六百年奉祝展への出品を勧められたことが契機であった（作品が到着せず、結局出品できなかった）が、背景にはもちろん、当時の日米関係の悪化があっただろう¹⁸。徳富蘇峰の主唱で、昭和 17 年（1942）に後援会が作られるなど、一部に吾蔵を支援する動きもあった¹⁹ものの、アメリカ帰りの彫刻家に当時の日本社会はおおむね冷たく、吾蔵が腕を振るう機会は、帰国前に比べて限られていた。昭和 19 年（1944）には、栞の長女・幸子を含む一家で吾蔵の郷里である白田町に疎開²⁰し、そこで終戦を迎える。昭和 21 年（1946）1 月、吾蔵は GHQ から、通訳官として働くことを命じられた²¹。その仕事の間、一家は上田、軽井沢へと転居している²²。

昭和 22 年（1947）9 月、吾蔵が横須賀基地のデッカー司令官に「横須賀基地美術最高顧問」として招聘されることとなり、一家はさらに横須賀に移り住む²³。EM クラブの三階にアトリエと住居が提供される²⁴など、吾蔵はこの地で再び、芸術家としての待遇と活動を保障され、晩年を過ごした。しかし、昭和 25 年（1950）3 月 11 日、吾蔵は横須賀市の聖ヨゼフ病院で胃がんにより死去する。石膏原型まで完成していた《マッカーサー元帥》胸像は、栞と長女の幸子によって鑄造された²⁵という。遺作《マッカーサー元帥》は同年の日展に入選。同年 11 月 28 日には、《マッカーサー元帥》胸像の除幕式が日本橋三越で行われた²⁶。吾蔵の没後、栞と幸子の手によって吾蔵の作品として完成されたものは、このほかにも《ヘレン・ケラー》《尾崎罌堂翁》など多数ある²⁷という。

昭和 52 年（1977）、70 代半ばとなった栞は、白田町に帰り、翌年に同地の施設に入所する²⁸。この際、吾蔵作品 14 点が白田町に寄贈された。ほぼ同じ時期、やはり川村栞の名義により、吾蔵作品 14 点が横須賀市に寄贈されている（昭和 53 年 3 月 15 日付）。これらは横須賀市文化振興課の所管となっていたが、横須賀美術館の設立にともない、このうち 6 点が美術館に移管され、所管が 2 課に分かれた状態で現在に至っている。

また、昭和 55 年（1980）には、東京国立近代美術館に吾蔵作品《牛（ホルスタイン種）牡》《同 牝》を寄贈した。翌昭和 56 年（1981）4 月に栞は 78 年の生涯を終える。

白田町に寄贈された吾蔵作品は、白田町文化センターの管理を経て、平成 17 年（2005）に白田町と合併した佐久市により平成 22 年（2010）3 月に設立された佐久市川村吾蔵記念館で展示公開されている。

3. 川村栞による他の作例

川村栞は、吾蔵の没後、昭和 52 年（1977）に白田町に移るまでの間、横須賀市西逸見町で暮らした²⁹。昭和 28 年（1953）2 月の読売アンデパンダン展に《ジョセフ・J・クラーク中將像》（石膏）を出品する³⁰など、独自の制作活動を続け、昭和 29 年（1954）には、久里浜に工房を構えた³¹という。《林信雄先生像》も、この久里浜の工房で制作されたものだろうか。

同じころの川村栞の軌跡を示す実物資料として、久里浜のペリー公園内ペリー記念館に、いずれも胸像の《ペリー提督像》（昭和 28 年（1953 年））【図 2】、《戸田伊豆守像》（昭和 31 年（1956 年））【図 3】が残されている。

これら、対に見える 2 つの作品は、記念館の 2 階展示室内のガラスケース内と、記念館の出入口の両脇、屋外にそれぞれ設置されている。屋外のは明らかに銅像だが、ガラスケース内のは、その原型であるかもしれない³²。とにかく、同型の作品が 2 組存在している。屋外の作品 2 点の台石には、いずれも「市制 80 周年記念／寄贈 織茂光芳」とある。想像するに、昭和 62 年（1987）ごろ、ペリー記念館の整備にあわせ、織茂氏からの篤志を資金とし、ガラスケース内の作品を原型として、あらためて鑄造されたものだろうか。もちろん、それ以前から銅像が存在した可能性もある。いずれにしても、作者の没後に整備されたペリー記念館のためではないとすれば、これらが制作された目的は、もともと何だったのだろうか。

《ペリー提督像》の側面には、「昭和二十八年／川村栞作」の年記、署名があり【図 2 - 2】、背面には「COMMODORE MATTHEW C.PERRY/LANDED IN KURIHAMA/JULY 14.1853/CENTENNIAL MEMORIAL」と刻まれている【図 2 - 3】。同じように、《戸田伊豆守像》の側面には、「BY MRS.SHIORI KAWAMURA／川村栞作／1956／YOKOSUKA」との年記、署名があり【図 3 - 2】、背面には、「IZUNOKAMI TODA./MAGISTRATE OF URAGA／浦賀奉行／戸田伊豆守」と刻まれている【図 3 - 3】。

これによれば、《ペリー提督像》は、久里浜上陸 100 年を記念する意味で、1953 年に制作されたものとわかる。《戸田伊豆守像》の制作はその 3 年後の 1956 年であるが、サイズや様式がほぼそろっているところからみて、《ペリー提督像》の対になるものとして構想されたことは間違いないだろう。現状ではこれらの制作について刻銘以外に文献的な資料は見いだせず、制作の意図や経緯、発注者等についてこれ以上はわからない。ただし、《ペリー提督像》が制作された昭和 28 年（1953）には、7 月に市を挙げて「ペリリ提督来航百周年記念横須賀黒船祭」が催されており、26 日には、ペリーから戸田伊豆守へ親書を渡す場面を含む野外劇が、日米から千名が参加して行なわれ、注目を集めている³³。また、このイベントにあわせて総合文化施設としての「ペリリ記念館」が、久里浜の海軍工作学校あとの建物を利用して計画された³⁴。この施設は翌年 4 月、博物館法に基づく横須賀市博物館に改められ、10 月に開館式を行う。これらの一連の動きをみれば、川村栞による 2

件の肖像彫刻が、ペルリ記念館の流れを汲む横須賀市博物館の、初期の展示品として制作されたものではないかと想像できる。

サイズがそろっていると述べたが、これらは胸像としていずれも高さ1m弱と、等身大よりもかなり大きい。夫・吾蔵の本領は、30代のころ、師・マクモニスとともに存分に腕を振るった雄大なモニュメント彫刻である。栞自身も、戦後横須賀での吾蔵の仕事で、小型の原型からの拡大法を含む大規模彫刻の制作を経験していた。これらの作品のやや過剰とも思える大きさは、吾蔵の仕事を受け継ぎ、一人前の彫刻家として活動しようとした栞の気概を示しているのではないだろうか。

【図2-1】ペリー提督像（屋外設置作品）



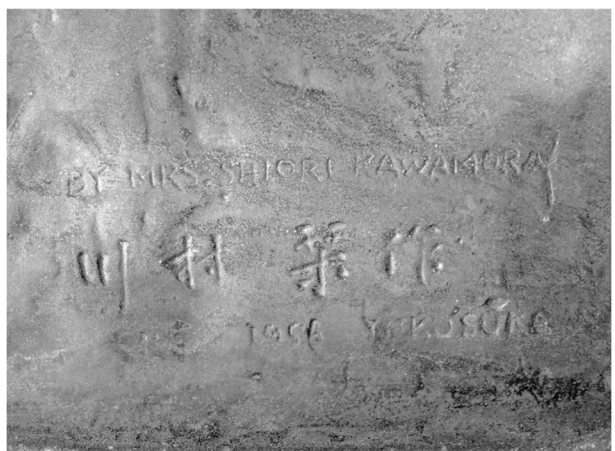
【図3-1】戸田伊豆守像（屋外設置作品）



【図2-2】向かって右側面刻銘



【図3-2】向かって右側面刻銘



【図2－3】背面刻銘



【図3－3】背面刻銘



おわりに

本稿では、川村栞の作とみられる3件の肖像彫刻について述べた。3件とも、実在の人物の胸像であり、右側面に年記と署名、背面にも作品の趣旨にあわせた刻銘がある点について共通している。これらは、吾蔵による肖像彫刻作品にもみられる特徴であり、その形式が栞の作品に継承されていることがわかる。ただし、これら3件を見る限り、人物の存在、生命感にまで深く迫る吾蔵と比べて、彫刻家としての力量の差は大きいと言わざるを得ない。

彫刻家としての川村栞の活動は、戦後の横須賀の特異な風景として、また、当時はまだ少なかった女性彫刻家の一例として、歴史的に考察することができるだろう。またもちろん、川村吾蔵とその作品について考える時に、その妻であり、制作助手であり、没後の顕彰者であった川村栞の存在について忘れることはできない。今後も、新たな資料の顕在化等により、その活動についての理解が深まることを期待する。

¹ 川村吾蔵の生涯を主題として著され、栞の経歴についても触れた文献として、主に次に挙げる二書がある。飯沼信子『彫塑家・川村吾蔵の生涯』平成12年、舞字社／新海輝雄『ぼっかり ふんわり 川村吾蔵物語』平成20年、櫟

² 新海前掲書、p.167

³ 新海前掲書、p.170

⁴ 飯沼前掲書、p.147

⁵ 新海前掲書、p.170

⁶ 飯沼前掲書、p.147。「錦華高等洋裁女学校」の設立時期について、飯沼は、前野不二男との結婚と同時に、とし、新海は、前野不二男の没後（昭和11年（1936）頃）（新海前掲書、p.317,p.333）としている。校名を「錦華洋裁専門学校」とする新聞記事もある（「海を越えて「光」失明勇士を激励の日本女性」朝日新聞（夕刊）昭和13年（1938）5月12日付）。

⁷ 新海前掲書、p.146

⁸ 飯沼前掲書、p.147

⁹ 飯沼前掲書、p.152

-
- ¹⁰ 飯沼前掲書、p.29
- ¹¹ 飯沼前掲書、p.40-45
- ¹² 飯沼前掲書、p.61-63
- ¹³ 飯沼前掲書、p.63-67
- ¹⁴ 飯沼前掲書、p.136-139
- ¹⁵ 飯沼前掲書、p.139
- ¹⁶ 飯沼前掲書、p.125-128,p.145
- ¹⁷ 新海前掲書、p.172
- ¹⁸ 飯沼前掲書、p.162-163／朝日新聞（夕刊）昭和16年（1941）2月9日付
- ¹⁹ 飯沼前掲書、p.174-176
- ²⁰ 飯沼前掲書、p.178-179
- ²¹ 飯沼前掲書、p.11
- ²² 飯沼前掲書、p.13
- ²³ 飯沼前掲書、p.14
- ²⁴ 新海前掲書、p.269
- ²⁵ 飯沼前掲書、p.23／読売新聞（夕刊）昭和25年（1950）11月5日付
- ²⁶ 飯沼前掲書、p.26／読売新聞 昭和25年（1950）11月29日付／朝日新聞同日付
- ²⁷ 新海前掲書、p.334,335。吾蔵が着手した作品を引き継いで「完成」させる、ということが何を指すのかは、作品によって異なり、注意を要する。《マッカーサー元帥》については、吾蔵が遺した石膏原型を鑄造することを「完成」とみているいっぽうで、《ヘレン・ケラー像》については「顔だけ出来たところで吾蔵他界したので後をしおりが完成させる」（飯沼前掲書、p.157（図版キャプション））という。なお、当時の日本の彫刻界でも彫刻の制作（塑造）と鑄造は分業制がふつうであり、彫刻家が自ら鑄造を手掛けることはむしろ稀であった。
- ²⁸ 新海前掲書、p.335（年譜）
- ²⁹ 新海前掲書、p.301
- ³⁰ 読売新聞 昭和28年（1953）2月16日付
- ³¹ 新海前掲書、p.305,p.334
- ³² 今回、ガラスケース内の作品について素材を確かめることはできなかった。ガラスケース内の作品と屋外の銅像を観察により比較すると、細部の特徴が一致することから、少なくとも両者は同型とみられる。いっぽう、前者の表面には、後者にはない細かな凹凸がみられることから、前者が後者の原型である可能性はあっても、その逆とは考えられない。
- ³³ 読売新聞 昭和28年（1953）5月13日付／7月15日付／7月27日付／神奈川新聞 昭和28年（1953）7月15日付／7月19日付／7月20日付／7月27日付
- ³⁴ 「ペルリ記念館 近く着工へ」読売新聞 昭和28年（1953）5月13日付